

二〇一八年度

沖縄大学 一般入試（中期）

「国語」

問題用紙

・法経学部 法経学科

・人文学部 国際コミュニケーション学科

福祉文化学科

こども文化学科

国語

※答はすべて解答用紙に書きなさい。

【問題】「芸術ってなんのためにあるの？」という疑問に関する次の二つの文章（「文章1」、「文章2」）を読んで、あとの問いに答えなさい。

〔文章1〕

芸術って何のためにあるのだろう。下準備として芸術って何か考えておかないといけない。芸術は美術館にあるのではなく、身近にあるもので、誰にとっても必要なものだ。決して①高尚なものではないし、そうあつてはならない。【A】、Jポップだって、アニメだって、芸術だ。形に残る必要もない。

高価で売り買いされ、ビジネスの②たいしようになるものが「芸術」と呼ばれているけれど、本当はそうではない。芸術は金儲けのためでも、ヒマつぶしのためのもでもない。人間が人間として存在していくために必要なのだ。

未来と死という、見ることでできない荷物、とても重い荷物を人間は背負っている。長い道のりの中で、その荷物で③腰砕けにならないための支えとして芸術はあると思う。

人間が生きていくことを、歩くことになぞらえると、どういう歩き方になるんだろう。お金や④めいよを目指して誰よりも早く進むような駆け足だろうか。アルコールやギャンブルにはまって、ふらふら歩く⑤千鳥足だろうか。誰かが助けてくれるまで起き上がろうとしない行き倒れだろうか。自分の失敗を他の人にも味わわせるために足払いをかけ続けることだろうか。【B】、芸術はそういう歩き方と別のところにある。

人生は、未来に背中を向けて、後ずさりしていくことと似ている。未来は見るができない。背中につかるものが、非難の石つぶてなのか、会場を揺るがす声援なのか、未来に進み、目にするこゝとができたときにやつとわかる。今は見えないものを信じられる者だけが、未来に向かって後ろ向きに進むことができる。(1) 見えないものを恐れる者は一歩も未来に進めない。

人生とは思わずだけで胸をかきむしりたくなる失敗が積み重なっていくことだ。【C】(2) 表現されない感情は名前と形を求めて暴れ回るのだ。表現せずにはいられない表現衝動、そこから芸術は現れてくる。表現されない限り、感情は名前を持たない。それは、⑥きおくの中に静まることなぐ心をさいなみ続ける。だから芸術は必要なのだ。呪いも歌も踊りも大声も、人々に伝わり、流通する限り芸術と呼んでよい。

芸術は「美」だけを求めるのではない。美とは、心を引き寄せるもので、大事だが芸術の本質ではない。芸術の本質は、事実の中にあるのではなく、事実を越えたところにある。その姿を「美」と呼んでもよいけれど。

押しつぶされそうな悲しみに溢れる涙も、世界中の喜びが自分に集まってきたように感じられる幸せも、「美」であるはずだ。(3) 美とは、他者と共有され、伝えられ、社会の中で流通し、共有の財産

となつて蓄積されていくものだが、その本質は、ライブの中での表現と感動とのやりとりの中にある。伝わっていく力こそ「美」である。そういう場面で、人間の情念は、事実を越えてゆくための足場となつていくのだ。

事実を踏まえながら、事実を越えていくことこそ、人間存在の本質構造である。事実を越えてゆく力を、事実が与えることはできない。芸術の⑦ほんりようはそこにある。

【文章2】

「それは何のためのものか」という問いには注意が必要です。時としてそれは「何かのための手段」として役立つものだけを意味あるものと考える⑧せいきゆうさをひそませており、「役に立たないもの」を無意味なものとして切り捨てる暴力に変化して、結局、私たちの生活を空っぽで味気ないものにしてしまう恐れがあります。

【D】私たちの「生」そのものは、「何かのための手段」として外側から意味づけられるものではありません。芸術は、この内側から⑨享受されるほかない生と密接に結びついているのではないのでしょうか。ちやうど「食べる」ことが、単なる「生きるための手段」などではなく、生きること自身の活動のひとつとして、それ自身において味わわれるように、芸術もまた、私たちの生の活動のひとつとして、それ自身の幸福において喜ばれるものであると言えないでしょうか。

【E】たしかに、他人との比較や競争に明け暮れがちな世間や学校では、音楽や図工の時間も、ちっぽけな⑩ゆうえつ感や⑪れつとう感の材料さがしの時間となりがちで、「芸術の喜び」だなんて綺麗事にすぎないと思われてくるかもしれません。

でも、そういう窮屈な比較の空間を離れて、そもそも私たちはどのようなときに歌や音楽にひかれ、自らも声を上げて歌い⑫奏でたくなるものなのか、あるいは一般に、私たち人間を芸術的な表現へと駆り立てるのはどのような欲求であるのかを考えてみましょう。これはなかなか簡単には答えられない難問ですが、ひとつには、過ぎ去りゆく世界の⑬彩り、きらめき、あるいは生きてあることの情感を、ただいたずらに過ぎ去らせたくはないという思いが、およそ「作品」というものを生み出そうとする表現活動の根底にはあると言えるかもしれません。私たちの心には、何か光るものが不意に舞い降りてきた生の瞬間を記念したいという根源的な欲望がひそんでいて、雨の日には雨の雫のきらめきが、晴れた日には青空のもとを吹きすぎていく風の光が、ただいたずらに流れ去ってしまったといううちに、それらを歌の言葉やメロディーや色かたちのうちに留めたいと願わずにはいられないのではないのでしょうか。そんなふうにして、この世に生きてあることの感触や意味を再発見し編み直していくことが、私たちの生を内側から支えているのではないのでしょうか。

そうした芸術的表現の努力には、また、どこか「祈り」にも似た心がこめられることがあるように思われます。ある詩人は、詩とは「壇びんに入れて海に流す手紙

のようなものではないかと問いかけました。彼は、彼が「あなた」と呼びかける相手のもとに、その手紙が届くことを祈りながら、ひたすら自身の言葉を⑭研ぎ澄ましていきました。私たちも、たまたま出会った作品のなかに思いがけず自分に宛てられた手紙のような言葉を発見することがあるかもしれません。千年前に歌われた歌の響きが、今夜の月の光に重なって見えることもあるでしょう。私たちの命や心の動き自体は、はかなく過ぎ去りゆくものですが、芸術という（秘かな「祈り」をはらんだ）人間の生を記念する共同の経験のなかで、私たちの心は時間と空間の距離をこえて響きあい幾重にも編み直されていくようです。それも

【 F 】 「芸術の喜び」と言えるのではないでしょうか。

野矢茂樹 編『子どもの難問 ―哲学者の先生、教えてください―』中央公論新社（「文章1」は、山内志朗「感情が表現を求めて荒れ狂う姿が芸術だ」、「文章2」は、古荘真敬「生を記念する共同の経験」）より。ただし、一部改変した。

問一 傍線部①から④の漢字にはひらがなで読みをつけ、ひらがなは漢字に直しなさい。

問二 【 A 】 から 【 F 】 にあてはまるものを次のなかから選んで入れなさい。
なるほど だから そして また しかし そもそも

問三 本文中に傍線部（1）「見えないもの」とあるが、具体的には何を指しているか。二十五字以内で答えなさい（句読点も字数に数える）。

問四 本文中に傍線部（2）「表現されない感情は名前と形を求めて暴れ回るのだ」とあるが、それについて、答えなさい。

【小問一】このことを表現している言葉を「文章1」から四文字で抜き出しなさい。

【小問二】このことを表現している部分を「文章2」から二か所、それぞれ、三十字以上四十字以内で、抜き出しなさい。

問五 「文章1」の本文中に傍線部（3）「美とは、他者と共有され、伝えられ、社会の中で流通し、共有の財産となって蓄積されていくもの」とあるが、「文章2」の言葉を用いて、一〇〇字程度でわかりやすく説明しなさい。

問六 この二つの文章についてのあなたの意見や感想を二〇〇字程度で書きなさい。